

## 地域との協働による青少年野外活動プログラムの開発と実践

Development and practice of the youth outdoors activity program by cooperation with local populace

池田 拓人

IKEDA Takuto

(和歌山大学教育学部)

本研究では、教職を志望する学生が主体となって、子どもを対象とした宿泊を伴う自然体験活動を主催して、参加した子ども達に地域の自然環境について再発見する機会を提供するとともに、地域の特色を生かした体験プログラムの開発について取り組んだ。また、運営に携わる学生が管理運営能力を養い、小学校において新たに実施される長期自然体験活動に対応しうる教員としての実践力を身につけることを目指した。

**キーワード：**長期自然体験活動、小学校、指導者養成、プログラム開発、地域との協働

### 1. はじめに

近年、自立の意欲に欠ける青少年の増加が問題となっている。その要因として、直接体験の不足（体を動かす体験、自然体験）、生活習慣の乱れ（夜更かし、朝食欠食）、希薄な対人関係（保護者の関与が少ない、地域の大人の関与が少ない、仲間との接触が少ない）等の理由が考えられている。

平成19年1月の中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」では、「すべての青少年の生活に体験活動を根付かせ、体験を通じた試行錯誤や切磋琢磨」を支援することが重要であると、その対応策について提言しており、青少年に対する自然体験や交流体験など体験活動（とくに集団宿泊）の必要性が強調されている。

さらに、「教育振興基本計画」（平成20年7月1日閣議決定）においても、施策のひとつとして「小学校で自然体験・集団宿泊体験を全国の児童が一定期間（例えば1週間程度）実施できるよう目指すとともに、そのために必要な体験活動プログラムの開発や指導者の育成を支援する」ことが明記されるなど、小学校における長期自然体験活動の実施に向け動き始めている。

これをうけて文部科学省では、平成20年度より「青少年体験活動総合プラン」として、小学校において新たに実施される長期自然体験活動（1週間程度の集団宿泊体験）に対して、必要な指導者の育成と体験活動プログラムの開発についての推進事業が始まっている。

和歌山大学教育学部では、保健体育専門科目としてキャンプを中心とした夏の野外活動の授業を昭和44年より実施してきた<sup>1)</sup>。現在は「野外実習キャンプ」と

して、毎年9月下旬に学外において2泊3日の実習を行っており、平成21年度には通算36回目の開講を迎えた<sup>2)</sup>。近年の実習について見てみると、受講学生は教員の指導助言のもと、自らが企画、準備、運営を遂行するなかで、野外活動の基礎的な知識や技術を学んでいくという形式で行ってきた。2泊3日の現地実習の中では、各アクティビティごとの担当者が指導者として、それ以外は参加者として、役割分担により学生同士が一つの教育キャンプをシュミレーションしながら実践技術を体験学習している。

さらに、より実践的な野外活動の指導技術を身につけたいと希望した学生有志によって、大学授業で学習した野外活動の技術を生かしながら、地域指導者の方たちの協力のもと、地域の団体が主催する子どもを対象とした野外活動事業の企画運営にボランティアとして参加し、その活動を通して指導者としての実践力の向上に努めてきた<sup>3)</sup>。

このような実践経験の積み重ねを踏まえて今回、彼ら学生たちが主体となって、子どもを対象とした宿泊を伴う自然体験活動（キャンプ）を主催した。教職を志望する学生自ら計画立案および広報活動、運営実施にいたる事業の遂行を通して管理運営能力を養い、新たに実施される小学校の長期自然体験活動に対応しうる教員としての実践力を身につけることを目的とした実践を行った。

また、大学周辺の自然環境とりわけ紀ノ川流域の豊かな自然に富んだ環境を背景とすることで、参加する子どもたちに地域の自然環境について再発見する機会を提供するとともに、こうした地域性を生かした特色ある体験プログラムの開発について取り組んだ。

実施にあたっては、これまで学生たちが野外活動ボ

ランティアを通じて協力を得てきた地域指導者の方々に、今回の取り組みについて地域協力者（アドバイザー）として参画して頂くことができた。こうした大学と地域との協働により青少年の野外活動をサポートするひとつの事例として報告するものである。

## 2. 活動の概要について

表1 実施概要

テーマ	「きて！みて！さわって！～森のくらしを新発見～」
日程	2009年11月22日(日)～23日(月) [1泊2日]
会場	和歌山県立森林公園 根来山げんきの森（岩出市）
参加者	小学校4・5年生 9名
主催	和太教育キャンプ研究会
後援	和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会

### 2. 1 キャンプの主旨

まず、現代の子どもたちは、森や自然との関わりが少なくなってきたように感じられ、子どもたちに森や自然の中で遊んだり生活したりする機会を作りたいと、学生たちは考えた。そして、そうした体験活動を通して、自分と自然との関わりに関心を持ち、自然のすばらしさに気づき、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫できるようになるきっかけ作りになって欲しいという願いを込めて、「きて！みて！さわって！～森のくらしを新発見～」というテーマを掲げた。

### 2. 2 日程について

野外での活動や野営を想定した場合、参加者の健康管理を考えるうえでは、あまり寒くない気候の時期に日程を設定したいと考えた。一般的には秋季であれば9月下旬から10月下旬頃が活動しやすいと思われる季節であったが、大学のキャンプ実習が9月下旬に設定されていることや参加者募集を行う上で学校の運動会シーズンをできるだけ外したいこと、さらに準備を進める上での学生スタッフの都合などを考慮したところ、11月での設定にならざるを得なかった。準備の都合上、3連休となる期間（11/21～23）の後半2日での実施計画となった。

### 2. 3 活動場所について

会場とした根来山げんきの森は、自然豊かな里山の環境が今回の活動内容に適していること、さらに学生たちがこれまでも野外活動ボランティアとして当地での活動に参加してフィールドをよく知っている場所であった。加えて、それらの活動を通して現地の指導者との親交もあり、公園を管理するNPO団体のスタッフの方々の協力・支援を得られることも会場選定の大きな理由であった。

### 2. 4 参加者および広報活動について

参加対象者は小学校4～6年生とし、15名を定員に

一般募集を行い、4年生5名、5年生4名の計9名の参加者を得た。男女別では、5年生に女子2名、残り7名は男子であった。

居住地別では参加者9名のうち、6名が和歌山市、2名が岩出市、1名が紀の川市であった。また、友人同士での参加が多かったようである。

参加者募集についての広報活動は9月初旬頃から始め、和歌山市内及び岩出市内の公共施設34カ所へのポスター貼りやビラ配りなどを行った。一方、報道各社に対して参加者募集の記事掲載の依頼を行い、タウン紙・一般紙など計4紙に記事が掲載され、参加者募集に有効であった。



図1 参加者募集ポスター

また、小学校において新たに実施される長期自然体験活動を念頭に置いた今回の取り組みについて、和歌山県教育委員会および和歌山市教育委員会からその主旨に対して賛同が得られ、後援を受けることができた。これにより、参加者募集および事業運営上の大きな後押しとなった。

表2 新聞等への記事掲載

2009年10月3日	ニュース和歌山
2009年10月9日	産経新聞
2009年10月17日	リビング和歌山
2009年11月14日	わかやま新報

### 2. 5 スタッフおよび組織

これまで野外活動ボランティアとして経験を積んできた学生を中心に、教育学部保健体育専攻学生15名がスタッフとして参加した。このうちのほとんどが、先

述した大学授業の「野外実習キャンプ」をすでに履修済みの学生であった。

今回は対外的に事業を主催するということも踏まえて、筆者を指導教員とする学生スタッフ15名による研究サークル「和太教育キャンプ研究会」を立ち上げ、組織して事業を展開していくこととした。

さらに、学外の地域指導者4名に地域協力者という形で今回の事業に対するアドバイザーとして協力を得ることができた。いずれも和歌山県キャンプ協会に所属する野外活動指導の有資格指導者である。各団体において地域における野外活動の指導実践を行っている経験豊かな指導者である。また、これまでも学生の野外活動ボランティアを通して協力を得てきており、学生スタッフとも以前より交流のある方々であった。

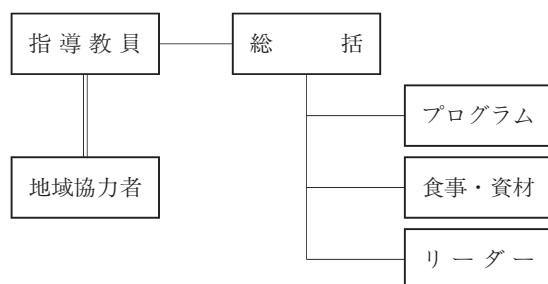


図2 組織図

指導教員（筆者）を代表として、学生スタッフを担当ごとに役割分担を行い、図2のように組織を構成した。「総括」は、学生スタッフ業務全般のとりまとめ役として、学生1名（4回生）が担当した。「プログラム」は、2日間のキャンプの中で実施するアクティビティの企画・運営に関する業務を行い、学生2名が担当した。「食事・資材」は、キャンプにおいて提供する食事に関する準備と運営および野営に必要な資材調達を行い、学生5名が担当した。「リーダー」はキャンプ期間中、子どもたちと行動を共にして安全管理や引率指導を行うもので、学生7名が担当した。このうちの2名は、記録担当として子どもたちの活動の様子を撮影するなどの観察記録を主業務とした。

「プログラム」「食事・資材」「リーダー」にはそれぞれ主任（いずれも4回生）を置き、「総括」を含めた学生4名と指導教員で事務局を構成し、まずは全体計画の企画立案について協議を進めていくこととした。

表3 スタッフの構成

指導教員	1名	
学 生	15名	4回生：5名
		3回生：6名
		1回生：4名
地域協力者	4名	

## 2. 6 キャンプ当日までの流れ

キャンプの計画立案、企画運営について、事務局とスタッフ全体による実行委員会（10月以降）を週1

回ペースで行い準備を進めていった。このほか、役割分担による各係での準備作業も同時進行で行った。

また、事務局会・実行委員会には、地域協力者の方にも毎回参加して頂いて指導助言を受けたほか、現地でのオリエンテーションや準備作業、当日のキャンプにも参加して実地指導して頂いた。

当日までの準備活動や会議等の経過の概要について主要なものを以下に示す。

- 7/8 事務局会：事務局立ち上げ、キャンプの実施概要について検討
- 7/15 事務局会：今後の準備活動の進め方、当日のタイムテーブルについて検討
- 7/22 事務局会：テーマ確定、役割分担、予算について検討
- 8/2 現地公園視察および現地協力者との打ち合わせ：プログラム内容について検討
- 8/11 事務局会：食事およびプログラム内容の具体案について検討
- 8/27 和歌山県教育委員会を訪問：後援について申請
- 9/2 和歌山市教育委員会を訪問：後援について申請
- 9/4 参加者募集について報道各社に情報配信
- 9/7 事務局会：プログラム内容の詳細について検討
- 9/10 事務局会：当日の各係の動きについて検討
- 9/16 事務局会：食事内容の確認、保護者説明会およびスタッフオリエンテーションの計画について検討
- 9/29 ポスター貼り・ビラ配りを開始  
〈10月以降、実行委員会に並行して事務局会も開催〉
- 10/7 実行委員会：これまでの経過確認、広報活動の状況報告、資材調達の計画、今後の予定について検討
- 10/13 実行委員会：プログラム内容の進捗状況、当日のスタッフ配置について検討
- 10/21 実行委員会：資材調達の予定確認、荒天時プログラムの検討、スタッフオリエンテーション日程確定
- 10/27 実行委員会：スタッフオリエンテーションの内容について、リーダートレーニングの計画について
- 11/1 スタッフオリエンテーション（現地にて）：プログラムの流れを確認、食事の試作、各係ごとのシュミレーション
- 11/4 現地近隣病院へ訪問し、緊急時の受け入れ要請
- 11/4 実行委員会：プログラム内容の調整、保護者説明会の準備、資材調達の確認
- 11/7 保護者説明会（現地にて）：詳細については後述する（\*）
- 11/10 実行委員会：参加者確定（9名）、食事の調理・配膳の流れ確認、プログラム内容の調整、緊急時の対応・医療体制について、今後の作業確認等
- 11/14 最終確認作業（現地にて）：全プログラム・係の活動の確認、テント設営の予行練習、資材お



よび無線機材の確認作業

- 11/17 実行委員会：2日間のタイムライン最終確認、  
参加者配布用しおり、スタッフ用冊子の内容確認  
11/21 前日準備（現地にて）：資材搬入、設営準備、  
当日の流れについて最終確認  
11/22～23 キャンプ当日

#### \*保護者説明会

11月7日(土)に参加者の保護者を対象とした説明会をキャンプの会場となる根来山げんきの森内の公園施設で開催した。まず、主催者について保護者に理解してもらうこと、またキャンプの主旨について把握して、具体的な実施計画を知ってもらい、子どもを参加させる上での安心感を持ってもらうことを主眼に置いた。説明会には、キャンプ参加申込者9名のうちの4名の保護者が参加した。

配付資料をもとに、実施計画の詳細や緊急時の体制、当日の持ち物、注意事項等について説明を行ったあと、実際に野営地などを見てもらい公園内の活動場所を案内した。直接、保護者に現地を見て肌で感じてもらったことでロケーションの良さも伝わり、実施計画に対する想像も膨らみ、保護者の期待感の高まりをその様子から感じとることができた。

学生スタッフにとっては、実際に保護者の顔を見ることで緊張感の高まりとともに責任の大きさを実感することになったであろう。一方で、保護者の期待感の高まりを感じたことで、事業遂行に対する意欲を一層大きくすることができた。

また、キャンプに参加する子どもたちも数名、一緒に来ていたため、保護者説明会を行っている間、リーダーが子どもたちと公園内の散策に出かけて、コミュニケーションを深めることができた。学生スタッフにとっても本番に向けて安心感の得られる機会となったようであった。

## 2. 7 キャンプ当日の活動

表5は、キャンプ当日2日間のタイムテーブルである。活動内容は、自然とのふれ合いや自然への気づきを意識したプログラム構成になっている。また、地域の特色を生かした活動となるよう配慮した。例えば、活動の目玉のひとつである炭焼き体験では地元和歌山の特産品である備長炭と関連させ、環境に負荷の少ない自然エネルギーについての理解を深められるよう考えた。さらに、野外炊飯ではできるだけ地元で採れた食材を多く入れた献立とするなど配慮した。

子どもたちは学年別で活動班を構成し、各班に2名ずつ（男女各1名）専属の学生リーダーがついて引率しながら活動を行っていった。（表4参照）

表4 活動班の構成

	子 ども	学生リーダー
4年生班	5名（男5）	2名（男1、女1）
5年生班	4名（男2、女2）	2名（男1、女1）

以下では、主な活動内容について紹介していく。

### □オリエンテーション

まず、今回のキャンプのテーマである「森のくらしを新発見」について、子どもたちに紹介し、スタッフの思いを伝えた。活動班の発表やリーダーを紹介した後、2日間のスケジュールの確認をした。

また、インフルエンザが懸念された時期であったため検温を行い健康管理に努めた。



写真1 オリエンテーション

### □アイスブレイク

子どもたちの緊張した気持ちを和らげたり、出会ったばかりのお互いを知っていくためのコミュニケーションをはかるゲームで子どもたち同士、またリーダーとも次第に打ち解けていった。



写真2 仲間づくりのゲーム

### □昼食（1日目）

初日の昼食は各自で持参した弁当。少し気温の低い時期であったので、温かいスープを用意した。子どもたちは、何杯もおかわりしていた。

### □ネイチャーゲーム

五感を使って自然を感じるネイチャーゲームで、子どもたちは楽しみながら、今まで気づかなかった森の自然を体感した。



表5 キャンプ・タイムテーブル

1日目(11月22日)		2日目(11月23日)	
時 間	活 動 内 容	時 間	活 動 内 容
8:00	スタッフ集合 全体打ち合わせ	5:00	スタッフ起床
8:30	各係で準備	6:00	起床
10:00	参加者受付	6:20	朝のつどい
10:30	開会式・オリエンテーション	6:30	朝食作り
11:00	アイスブレイク	7:00	朝食
12:20	昼食	8:00	テント内の荷物の片付け
13:20	ネイチャーゲーム	8:30	自然観察／森の探検 クラフト材料集め
15:30	炭焼き体験(竹炭の窯入れ)	11:40	竹炭の窯出し
16:00	夕食作り 火つけ体験／野外炊飯・調理	12:00	昼食
18:00	夕食	13:30	クラフト 写真立て作り
19:00	ナイトプログラム／炭のお話・花火作り 缶ランタン制作	15:00	閉会式・参加者解散
21:00	就寝準備		撤収作業
21:30	就寝(テント泊)		
22:00	スタッフミーティング		
0:00	スタッフ解散	17:00	スタッフ解散

## □炭焼き体験

根来山げんきの森のスタッフ数名を講師に迎えて、公園内の炭焼き窯で炭焼き作業を教わった。子どもたちは竹炭の原木の窯入れ作業を体験した。翌日には、焼き上がった竹炭の窯出しも体験し、お土産として持ち帰った。

## □夕食作り

野外炊飯により子どもたちも調理を行った。まずは、火つけ体験で点火のコツや薪の組み方などを学生スタッフから教わった。献立は、ご飯・ローストビーフ・焼き芋、みそ汁。



写真3 特製ローストビーフ

## □ナイトプログラム

根来山げんきの森・事務局の方を講師に迎え、炭のできる仕組みや炭の用途などについて子どもたちにわかりやすく話して頂いた。また、炭の粉を使った線香花火作りをして、子どもたちは興味津々に手作りの花火で楽しみながら炭の勉強をした。

夕方から降り出した雨のため、その後予定していた「夜の森の探検」を変更して、缶ランタン作りをした。空き缶に針で穴を開けて、子どもたちは思い思いのデザインをした。完成した缶ランタンに火を灯すと子どもたちは皆、満足げな様子を見せていた。



写真4 炭を使った線香花火づくり

## □就寝準備～就寝(テント泊)

気温が下がり、テント内の寒さが心配されたため、あらかじめ用意していたペットボトル湯たんぽを子どもたちに持たせてテントに入った。幸い、翌朝まで寒さを訴える子どもはなかった。

子どもたちが就寝後、スタッフは朝食で焼くパン生地の仕事が深夜まで続いた。

## □朝食作り

前夜に仕込んだパン生地を子どもたちが成形し、自分たちで焼いて食べた。手作りの焼きたてパンの味は格別の様子だった。



写真5 手作りパンを焼く

#### □自然観察

前夜に引き続き、根来山げんきの森・事務局の方を講師に迎え、公園内の森に入り動物や植物の観察をした。木の実を食べたり、きのこを拾ったり、草笛を教わったりして、森の中で楽しい時間を過ごした。



写真6 森の中の自然観察

#### □昼食（2日目）

2日目の昼食はスタッフが作ったカレーを食べた。自然観察で3時間も森の中を歩いた子どもたちはとてもお腹が減っていたようだった。

#### □クラフト

自然観察で集めた木の実や枝を板に貼り付けてオリ



写真7 クラフト／写真立てづくり

ジナルの写真立て作りに取り組んだ。できあがった写真立てには、活動班の仲間と撮った写真を入れて、2日間の思い出の品が完成した。

### 3. 活動の評価

#### 3. 1 参加者への自然体験効果

今回のキャンプが参加者の自己・他者・自然との関係に関する成長に及ぼす効果を検証するために、谷井ら<sup>4)</sup>が作成した「小・中学生用自然体験効果測定尺度」を用いて効果測定を調査した。

この尺度は「自己判断力」「自己成長性」「リーダーシップ」「対人関係スキル」「自然への感性」の5因子25項目で構成されている(表6、7参照)。各項目に対して「きわめてあてはまる」「かなりあてはまる」「わりとあてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の5段階評価によって回答を求め、「きわめてあてはまる」4点から「あてはまらない」0点までの5段階の配点で回答を得点化した。

アンケートはキャンプ実施前(以下、Pre)、実施1週間後(以下、Post)の計2回実施した。Preについては、キャンプ当日の受付後、活動開始までの時間を利用して回答を得た。Postについては、郵送法により行った。なお、Preについては参加者9名すべての回答を得たが、Postについて回答を得られたのは7名であった。したがって、Pre、Postともに回答の得られた7名を有効回答とした。

5つの因子に基づき回答者の因子得点を算出し、Pre、Postそれぞれの平均を求め、t検定を行った。その結果を表8に示した。

「自己判断力」については、PreよりもPostにおいて有意に高い得点を示した。親や家族と離れて行われる集団宿泊・集団生活においては、様々な場面で自己決定や自己判断を求められる。キャンプ生活やキャンププログラムの中でしばしば求められる行動傾向として、今回のキャンプを通して子どもたちにみられた変化ではないかと推察される。

「自己成長性」については、PreとPostにおいて有意な差は認められなかった。1泊2日という短期間の中だけで子どもたちの急激な成長を求めるのは難しいのかも知れない。中野ら<sup>5)</sup>は、本稿と同様の自然体験効果尺度を用い、異なる期間設定の自然体験活動での比較を行っている。それによると、実施期間が4泊5日より短いと児童の態度に有意な変化が見られない傾向があり、教育効果の観点からは5泊6日以上が必要であると述べている。

「リーダーシップ」についても、PreとPostにおいて有意な差は認められなかった。今回のキャンプでは、活動班に2名の学生リーダーが付いて行動を共にした。子どもたちには、グループ内での役割を特に与えることなく、基本的にはリーダー主導により行動することが多かった。したがって、子ども自身が集団をまとめたり主導的に行動する機会はなかったため、活

表 6 自然体験効果に関する質問項目

番号	質 問 内 容
(1)	班長やリーダーを積極的にひきうけることができる
(2)	歩いている途中で疲れても、もんくを言わないで歩き通すことができる
(3)	だれとでも気軽に話ができる
(4)	決められた時間に遅刻しないで行くことができる
(5)	食べていい木の実や草を知っている
(6)	みんなの意見をまとめることが得意である
(7)	友だちよりうまくできないことがあっても、いやになったりせず頑張り通すことができる
(8)	新しい友だちを簡単に作れる
(9)	朝、人に起こされなくても、自分で起きることができる
(10)	自然と人間の生活には深いかわりがあると思う
(11)	何かをやろうとすると、リーダーになってやる方だ
(12)	工作している途中で、失敗した部分があっても、自分で工夫して作品を完成させることができる
(13)	遊んでいる仲間とあとから加わることができる
(14)	脱いだ服や持ち物はきちんと整理できる
(15)	自然の中に行くと新しい発見がある
(16)	みんなのできないようなむずかしいことに挑戦する方だ
(17)	できないことがあるとできるようになるまで努力しつづける方だ
(18)	必要な時に、ありがとう、ごめんなさいが言える
(19)	暑い時や寒い時に自分で衣服を調整することができる
(20)	自然の中の活動は気持ちいい
(21)	困っている友だちを助けてあげることができる
(22)	出かけるときは、何が必要なのか自分で判断し必要なものを持っていくことができる
(23)	天候の変化が敏感にわかる
(24)	大人や年上の人に自分の考えを言える
(25)	草花や自然の景色を見て感動することがある

表 7 因子別の質問項目

因 子	所 属 項 目
自己判断力	(4)、(9)、(14)、(18)、(19)、(21)、(22)
自己成長性	(5)、(10)、(15)、(20)、(23)、(25)
リーダーシップ	(1)、(6)、(11)、(24)
対人関係スキル	(3)、(8)、(13)
自然への感性	(2)、(7)、(12)、(16)、(17)

表 8 キャンプ前後による自然体験効果の比較

	Pre		Post		t	P
	M	SD	M	SD		
自己判断力	13.00	2.73	15.57	3.42	3.71	Pre<Post**
自己成長性	14.60	1.85	16.40	2.06	2.78	ns
リーダーシップ	10.50	1.50	11.50	1.12	3.18	ns
対人関係	12.67	1.25	18.00	1.41	4.30	Pre<Post*
自然への感性	12.83	4.88	17.00	5.54	4.03	Pre<Post**

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01

動内容に相応の結果であったといえよう。この点については、活動計画において十分に企図されていなかった点であり今後の改善点であろう。

「対人関係スキル」については、PreよりもPostにおいて有意に高い得点を示した。子どもたちは、普段学校で毎日会っている友達と違う、初めて出会う仲間と集団生活を共にした。プログラムの中でも、仲間作りや新たな友との出会い、他者とのふれ合いを意識した活動の効果が見られたのではないだろうか。

「自然への感性」についても、PreよりもPostにおいて有意に高い得点を示した。この点については、今回のキャンプの最大の目的であった自然を感じ、自然への気づきを促す機会が今回のプログラムの活動内容において達成できたのではないかと推察される。

### 3. 2 保護者への事後アンケート

キャンプ実施1週間後に保護者に対するアンケート調査を実施した。郵送法により、得られた回答数は7名であった。質問内容とその結果を表9に示した。

表 9 保護者への事後アンケート結果

(1) 今回のキャンプをどのようにしてお知りになりましたか？  
(複数回答可)

	ニュース和歌山	リビング和歌山	友人の紹介
回答数	3	3	1
割合%	43%	43%	14%

(2) お子様はこれまでにテント泊の経験がありましたか？

	今回初めて	経験あり
回答数	4	3
割合%	57%	43%

(3) 今までにご家族でキャンプをされたことはありましたか？

	ある	ない
回答数	3	4
割合%	43%	57%



(4)お子様はこれまでに学校以外の野外活動イベントに参加されたことはありましたか？

	ある	今回初めて
回答数	4	3
割合%	57%	43%

(5)今回の会場「根来山げんきの森」には、これまでに遊びに来られたことはありましたか？

	親子ともある	親子とも初めて
回答数	4	3
割合%	57%	43%

(6)今回、お子様をキャンプに参加させるにあたり主催者に対する不安はありましたか？

	全くなかった	あまりなかった
回答数	3	4
割合%	43%	57%

(7)事前の保護者説明会やお送りした資料の内容はどうでしたか？

	よくわかった	ある程度わかった
回答数	5	2
割合%	71%	29%

(8)お子様はご帰宅後、ご家族にキャンプの話をされましたか？

	たくさんした	少しだけした
回答数	4	3
割合%	57%	43%

(9)今回の参加費（4,500円）について、どのように感じになりましたか？

	妥当	安い
回答数	6	1
割合%	86%	14%

(10)今後、お子様を1泊2日のキャンプに参加させる場合の参加費の上限はいくら位ですか？

	5,000円	6,000円	無回答
回答数	4	2	1
割合%	57%	29%	14%

(11)お子様をこのキャンプに参加させて良かったですか？

	良かった
回答数	7
割合%	100%

(12)今後、当会が主催する自然体験活動があれば、お子様を参加させたいと思われますか？

	ぜひ参加したい	できれば参加したい
回答数	5	2
割合%	71%	29%

(13)今回のキャンプ全体（内容、スタッフの対応等）について、お気づきになった点や改善すべきところなどがございましたら、何でも結構ですでお教え下さい。（自由記述）

設問(1)は参加者募集の広報活動に関する内容、(2)～(5)は参加者の野外活動経験などプロフィールに関する内容、(6)～(13)は主として今回のキャンプに関する内容についての質問である。なお、(1)～(12)は選択式、(13)は自由記述による回答形式である。

設問(6)について見てみると、子どもをキャンプに参加させるにあたって、われわれ主催者に対する不安を持っていた保護者は概ねいなかったことがわかる。学生が主体となって実施するということに対して、保護者が不安を抱かないかという点を若干懸念していたが、保護者への説明会をはじめ対応に細心の注意を払ったことの結果ではないかと考える。

同様に、設問(7)の結果からも保護者説明会や事前の配付資料等による説明が十分理解できる内容であったことがわかる。子どもを預かるうえで、まずは保護者の安心感を得るということの重要性について、学生たちも深く学ぶことができたであろう。

さらに設問(8)では、子どもたちは皆、帰宅後、キャンプでの出来事を家族に楽しく話したことが想像でき、参加者本人の満足感も得られたのではないかと推察できる。

そして、設問(11)の結果が示すように、今回のキャンプに対する保護者の満足感は十分得られたことがうかがえる。

また設問(12)からは、今回のキャンプの経験を通して、主催者に対する保護者の信頼感が芽生えたことがうかがえ、今後の活動への期待感を示しているといえよう。

設問(13)の自由記述による保護者の感想を以下に紹介する。

◇お世話になりました。お兄さん、お姉さんがすごくやさしかったと喜んでいました。雨だけが心配でしたが、いい体験ができ、すこし成長できたように思います。濡れた靴も乾かしていただき、カイロも持たせていただき、遅れて行動してもしっかりサポートしていただいたので、本当にうれしく思いました。スタッフのみなさん、ありがとうございました。

◇大変お世話になりました。数年前からキャンプ体験をさせたかったのですが、私の体力が不安でふみきれない時にちょうど目にとまって、とてもラッキーでした。TVやゲームから1日でも離れて、不便な生活体験というのはとてもいいものですね。また、是非何か企画があれば教えて下さい。

◇事前にキャンプの説明会やプログラムの内容が配られて、子どもを預けるのも安心できました。今回のように雨のキャンプの場合もキャンプの内容の変更があるのかとか、その場合は別にどんなことをするのかも気になりました。

◇家族で行くキャンプは、わりと親が何でもしてあげ

ていたので、今回はお友達とおにいさん、おねえさんと、ということで自立の一步をふみだせて良かったと思います。来年もぜひ参加したいと言っていました。スタッフの方々おつかれさまでした。(^^)

◇この度は、大変お世話になりました。初めての体験で戸惑いもありましたが、たくさんの事を教わり、楽しく過ごすことが出来たようです。また、このような機会があれば是非参加させたいと思います。ありがとうございました。

◇夜の観察が雨でなくなったのが残念だけど、代わりのクラフトがとてもよく出来ていて楽しく制作できたようです。炭焼きはもっと作るのに関わりたいかなと思います。あとで、アルバムやCDまで送ってもらえて、大変うれしく思っています。ありがとうございました。

### 3. 3 学生による自己評価

キャンプ実施の約1ヶ月後の12月15日に学生スタッフ、指導教員、地域協力者が参加して、全体の反省会を行った。各係での準備や当日の運営面など詳細に振り返りながら、反省や今後の改善点などについて総括を行った。

また、それぞれ個人での、今回の取り組みに対するふりかえりを感想として書き残すこととした。学生による自己評価として、その一部を以下に抜粋する。

◇キャンプを終えて、準備の段階から本番までの日々はとても充実したもので、良い思い出となりました。今までにやったことのない取り組みで、本番に近づくにつれて、不安とプレッシャーが大きくなっていましたが、その分とても達成感があるものとなりました。準備の毎回の会議の中では、キャンプをよく知る人達からアドバイスを頂き、子どもを預かるということとはとても大変で、責任のあることだと感じ、また、自分達の考えがとても甘く、いろんな視点から物事を考えていかなければいけないと感じました。プログラム内容がよく変更され、先が見えずに大変でしたが、子どもたちの笑顔を見られたり、「また来年も来たい。」という言葉などを聞くことができて、このプロジェクトを行ってよかったなと思いました。(4回生)

◇今回のキャンプは今までとは違い、楽しいということだけが記憶に残るキャンプではなく、みんなの苦労を凄く感じるものになりました。しかし、子どもたちの楽しんでいる姿や次第に仲良くなっていく姿をみているとみんなの苦労も報われるのだろうと感じていました。また、自分の力の無さを改めて感じ、自分を見つめることもできました。アドバイザーの方や先生をはじめキャンプのことを教えて頂いた皆様には本当に感謝しています。ありがとうございました。

した。(4回生)

◇今回のキャンプに参加することで、たくさんのことを経験することができた。私はキャンプに対して無知だったので、たくさんの迷惑もかけたと思う。でも、今回のテーマであった「自然を感じる」ということは伝えることができ、子どもたちは自然の美しさや楽しさ、また怖さも知ってくれたのではないかなと思う。また、伝えていく中で、改めて私自身も自然というものをを感じる事ができ、新しい発見もできた。またこのような機会があれば、ぜひ参加したいと思う。(3回生)

◇今回のキャンプは初めての試みということもあって、準備の段階からとても大変だったです。私はリーダーだったので、主に子どもたちとの関わりについてアドバイザーの方に教えてもらいました。危険予測から歩き方まで色々なことを教わって、自然の中での子どもとの関わり方について学ぶことがたくさんありました。このキャンプでの経験は教師になって現場で使えることもあるので、これで終わりじゃなくて次に生かしたいです。中心になって頑張ってくれた4回生の皆さん、お疲れ様でした。(3回生)

### 4. おわりに

今回の取り組みでは、学生が主体となって、子どもを対象とした宿泊を伴う自然体験活動を主催した。学生自身が企画・運営・指導を実践する機会を得られたことは有意義であった。また、地域指導者との連携により野外活動に関する新たな知識や技術を獲得することができた。今回の活動を通じて、とりわけ大学外で得られた経験は教員(指導者)としての資質の向上に大いに寄与するものであろう。

すでに、この活動に参加した4回生(当時)は今春卒業し、教員として学校現場で様々な形で自然体験活動を展開している。今後、大学と地域だけでなく、学校現場を加えた三者の協働によって、青少年の自然体験活動をサポートしていくことが望まれる。

なお本研究は、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択された、和歌山大学が取り組む「紀ノ川流域をフィールドとする自主演習～地域のシニアアドバイザーと学生のコラボレーションによる地域の活性化～」(平成19～21年度)の一環による研究成果であることを付記する。

### 注

- 1 中俊博ほか「野外活動実践の足跡と課題」和歌山大学教育実践研究指導センター紀要No.1、119-124頁、1992年
- 2 記録によると、昭和53、60、62年度および平成14、15年度については当該授業は開講されなかったようである。
- 3 学生有志による地域における野外活動ボランティアは筆者

の指導助言の下、2006年より継続して実施している。2009年度には「自主演習」として授業の一環に位置づけて行った。

- 4 谷井淳一、藤原恵美「小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発」『野外教育研究』5(1)、39-47頁、2001年

- 5 中野友博ほか「自然体験学習の実態と教育的効果についての調査研究」平成15・16年度研究紀要（兵庫県南但馬自然学校）、23-37頁、2005年